

## まち歩きによる観光の促進、魅力 PR

### 【取組の概要】「長崎さるく博'06」の開催を契機として、隠れた長崎らしさを発見し、市民が主役で進める観光まちづくり

長崎市は2006年、国内初の「まち歩き」をテーマとした博覧会、「長崎さるく博'06」（以下、さるく博）を開催した。「さるく」とは、長崎の方言で“ぶらぶら歩く”の意味。この博覧会には、従来型の大掛かりなパビリオンは一切なく、その代わりに用意されたのは、長崎市のまちの魅力を堪能できるよう市民と行政が一緒になって作りあげた「まち歩きコース」とそのツアーだった。

国内旅行の全国的な傾向を見ると、旅行の形態は団体から個人へと主流が変わり、観光客のニーズは見学中心から体験・交流を取り入れたものへとシフトし、さらに男性より女性に好まれる観光地が支持されるといった傾向が顕著となっている。さるく博を開催する以前の長崎市では、この観光の時流に乗るための十分な対応策を取れずにいた。長崎市への観光は、グラバー園、大浦天主堂、眼鏡橋、原爆資料館などの施設見学が中心で、長崎市にはその他にも歴史・文化に関わる豊富な観光資源があるにも関わらず、観光客が訪問できる体制の整備が不十分だった。また、学ぶ、食べる、参加する、交流するといった体験型メニューの開発にはほとんど手付かずの状態だった。長崎市の観光入込客数は1992年の570万人をピークに緩やかに減少し、2004年には493万人にまで落ち込んでいた。団体客の落ち込みが顕著で、中でも修学旅行生の落ち込みが激しかった。

長崎市の市職員と市民は、こうした状況に危機感を抱き、新たな観光まちづくりのあり方を模索していった。さるく博を企画するにあたって、観光の体験メニューの拡充として、パビリオンに予算をかけるのではなく、長崎市に既にある地域資源を活かすことを考えた。グラバー園や大浦天主堂以外にも、長崎らしい歴史や文化が感じられるポイントは豊富にある。長崎市の坂道をゆっくり歩いてみれば、“和・華（中国）・蘭（西洋）”の様々な歴史・文化に出会って知的好奇心が刺激され、地元ガイドや出会った住民との会話でまちのホンモノの生活文化に触れることができる。さるく博では、そんな観光を目指すこと



長崎さるく（まち歩きとガイドステーション(スタート地点)）

になった。

また、長崎市にとって、来訪者を拒まないという市民性を持った“長崎市民”こそ、長崎観光にとっての貴重な地域資源だった。来訪者をもてなすことと楽しいことが好きな“のぼせもん（熱中する人）”の長崎市民が、さるく博を支えた。さるく博は「市民が主役」で進められ、「市民プロデューサー」（95名）を中心に多くの市民によって42のさるくコースが作られ、さるく専門ガイドの「さるくガイド」（325名）と「さるくサポーター」（184名）（後述）が養成された（2009年1月現在は45コース、ガイドとサポート合わせて480名）。さるくのメニューも、特製マップを片手に自由に歩く「長崎遊さるく」、「さるくガイド」の説明を聞きながら歩く「長崎通さるく」、専門家による講座や体験を通して長崎をさらに深く探求する「長崎学さるく」の3種類に分けられ、多様なニーズに応えられるようにした。

市民が主役をモットーに進めたさるく博は、約1,023万人が参加し、長崎市の観光のあり方に大きな転換をもたらした。観光入込客数の緩やかな減少には歯止めがかかり、閉会後も大きな反動はなく、500万人台で推移している。長崎市のまち歩きは、「長崎さるく」として定着し、博覧会が終わった後も、新たな展開を見せている。

## 1. 「長崎さるく」実施に向けての体制づくり

### **基本理念は「まち活かし、ひと活かし」**

さるく博の企画は、2003年度から市民を中心とした委員会で策定に取り組んだ「長崎市観光2006アクションプラン」が基になった。さるく博の開催前、長崎市の観光客数は減り続け、2002年には、ついに年間500万人を切るようになっていた。長崎市を元気にするには、まず基幹産業である観光の振興を図らなければいけない、という認識は共有されていたが、誰が、どういう取組をすればいいのかが分からず、それを探ってみようということで、市民参画で作ったのがアクションプランだった。

アクションプラン策定のワーキングチームは、「まねぶ」（真似て、学ぶ）という姿勢を大事にし、視察した多くの先進地では、観光施設だけでなく、住民も一体となって観光まちづくりに取り組んでいることを学んだ。そして、国内観光の傾向、長崎市観光の分析結果、ならびに先進地の動向を踏まえて、長崎市観光の基本理念を「まち活かし、ひと活かし」とした。“ないものねだり”ではなく、“あるもの探し”をしてそれを生かしていく、つまり、地域の隠れた資源、隠れた人材を探そうという基本理念が固まった。グラバー園や大浦天主堂以外にも、長崎市には重要な資源があるはずであり、それを行政ではなく、市民主導で発掘していこう、という方針を決めた。

## 新たな観光ツールは「まち歩き」

長崎市観光活性化の具体策として、今後は個人観光客へのきめ細やかな対応が必要だと考え、その検討の中で出てきたツールが「まち歩き」だった。これまでになかった「まち歩き観光コース」を設定すれば、観光客は地元住民の生活文化に触れたり、直接会話することができ、また地元住民は市民としての誇りを持ち、まちをきれいにし、良くしようという意識が高まる。これまで活かせなかった長崎市の個性を活かすために、「まち歩きが楽しくなる仕組み・仕掛けづくり」を事業コンセプトとした。観光客がまち歩きをすれば時間をかけてゆっくり過ごす観光が生まれ、滞在時間が延長されて、宿泊にもつながる。ゆっくりした観光は、団塊世代の知的好奇心を満たすことができるし、リピーターとなる可能性も高まると考えた。

## 企画から実施まですべてを“市民”の力で実施する博覧会

2004年4月からは、アクションプランの策定委員会（2003年5月～04年2月）は推進委員会に発展し、実施計画を作り、さるく博の具体像を作り上げていった。推進委員会は、長崎市内の報道機関、経済団体、公的団体、市民団体、有識者からなる全110名の委員で構成されており、「企画から実施まで市民の力でやっつけよう、そしてその利益は市民が得るものとしよう」を、さるく博を進める上でのコンセプトとした。従来各地で見られた多くの博覧会では、企画の策定を東京資本の大手広告代理店などが担当し、大きなパビリオンを建設し、その運営も他所からの事業者が担う、というものであったが、さるく博の場合は、すべて市内の事業者と市民で実施するというコンセプトを持って、それを貫き、実際にほとんどを市民の力で進めていった。

## 「市民プロデューサー」の誕生

委員会では、「市民が主役」という流れで話が進み、中心となってプランを実行に移す「市民プロデューサー」をおくこととなった。地元タウン情報紙の編集を手がけてきた女性で委員として参加した川良真理氏は、これまで、仕事や趣味の旅行で知り得た観光地の情報を地元長崎市にフィードバックして活かす機会を求めている。だが、「言うばかり」（発言するだけで行動がない）人間が多くて嫌気がさす」という思いも持っていたため、自分が委員会で発言を重ねれば重ねるほど、自分の中で責任感が増していくのを感じていた。長崎市への熱い思いを持っているものの、自らが先陣を切ってイベントを成功させようというのには、ちゅうちょもあった。「市民プロデューサー」には興味があり、面白そうだと思っていたが、企画策定だけではなく実行まで引き受けたら、かなり動かないといけなくなるのは目に見えていた。その女性委員は、考え悩んだ末、市民プロデューサーを引き受けることにした。

川良氏と同じように、長崎市への思いを持ち続けていた4人の市民が市民プロデューサーとなり、さるく博をサポートする市民側の中心メンバーと決まった。4人の市民プロデューサーは、委員会が2004年2月にアクションプランを作りあげて、解散し実行に移る時、退くに退けなくなったという意味で、愛着を込めて「逃げ遅れた4人組」と呼ばれている。この4人組が信念を持って、当初からずっと関わり続けてきたから、プランを実行していく際にはブレや迷いが生じなかった。

## **企画当初は否定的な意見もあった「さるく博」**

長崎市では、以前に行政主導で大きな予算を費やして博覧会を開催したことがあり、さるく博の開催に対しても、企画当初は、「一部の人が儲けるだけ」、「地元は荒らされるばかり」といった否定的な意見も一部にあった。市民プロデューサーになることは、市民として批判する側ではなく、批判をされる側に立つということであり、信念と覚悟を伴うものでもあった。

4人組の予想していたとおり、市民プロデューサーとして活動していく中で、いろいろな人とのぶつかり合いが起こった。飲み屋に行くと、他の長崎市民と喧嘩になったこともあった。事務局以外の市職員からは、「あんたたちが市にいろいろ余計なことば言うけん、俺たちの仕事の増えたよ」、とからまれた。「私たちだって自分の時間ば割いて関わっとつとに、なんで市の連中にこんなことば言われんばいかんとね」と、やりきれない気持ちになるときもあった。

## **体験しないと分からない「まち歩き」**

企画当初、さるく博がなかなか市民に受け入れてもらえなかった理由として、主軸になっている「まち歩き」というのは、体験してみればすぐに分かるが、言葉だけではそのおもしろさが伝わりにくく、広く理解してもらうには時間がかかるということがあった。地元市民は、「毎日歩きよるまちばあらためて歩いたところで、何がおもしろかと？」と言い、観光客は「長崎市の観光はグラバー園と眼鏡橋を見て、平和公園に行ったら終わりでしょう？」と言った。

しかし、地元市民も観光客も、さるく博を実際に体験していくうちに、意識が変わっていった。まちの魅力というのは、名所・旧跡だけに限られたものではない。坂道や路地など、地元の人だからこそ知っていて、入り込んでいける空間があり、そうしたなにげない日常の生活空間にも長崎らしさがある。そこで、「この橋には、こんな逸話があるんですよ」と、「さるくガイド」から地元の“物語”を聞くと、参加者にはまちの景色がそれまでと違って見えてくる。参加者の満足度が高まると、ガイドする地元の人自身も満足できる。実物を見ながら物語を語って歩くというおもしろさは、体験した人だけに分かるものだった。

## 2. まち活かして発展した「さるく博」

### **2004年フレイブメントに向けて、地元自治会回りから始めたコースづくり**

2006年4月開催（～10月）のさるく博に向けて、2004年10月には、1か月間だけのフレイブメントを開催することになった。市職員2名と市民プロデューサー4名は、フレイブメントに向けて、試行的に4つのまち歩き「さるくコース」を作った。「さるくコース」は、これまで観光客が行かなかったようなまちなかや住宅地にもコースを設定するため、市職員は他部署の協力も得ながら、地域の自治会や商店・企業などをすべて回って、長崎市観光の現状、さるく博のコンセプトとまち歩きの方法、地元市民として何をしたいかを説明し、了承を得てコースを作りあげていった。地域の自治会は全部で900程あるが、市職員がコース策定に先立って、そのすべてに地道に話を回ったことが、フレイブメントを開催する際に、「さるくコース」への住民や商店の協力を得られた大きな要因となった。通常なら、居住空間を観光コースに組み込まれることには抵抗がありそうだが、住民や商店はおおむね好意的で理解を示してくれた。

### **「市民も観光客」から始めよう**

市民プロデューサーと市の事務局職員が議論を重ねて作業を進めて行く中で、さるく博のより具体的な方針が固まっていた。まず、県外からの観光客だけを意識する仕掛けには、市民プロデューサーたちの心は動かなかった。最初から、遠方から来る観光客をターゲットとするのではなく、長崎市に住んでいる人が自分の知らなかった長崎市を発見して、楽しんでお金を使うように、内需を先行させていくことを第一に考えた。自分と同じ仕事場や町内にいる身近な人と一緒にまちを歩いて、「毎日歩いていたのに、この家の向こうにこんなものがあるなんて知らなかった」、というような発見をしてもらうのが、市民プロデューサーたちの狙いだった。長崎市の人たちが盛り上がり、市外や県外の人をなんだろうと思っ、自然に引き込まれていくだろうと考えた。「市民も観光客」という考え方は、次第にさるく博にとって重要な意味を持つようになっていった。

### **市民も知らない地元に眠るストーリーの発掘**

一番最初に作った「さるくコース」は、観光客に人気スポットとなっている旧外国人居留地エリアのコースだった。しかし、有名な観光スポットのグラバー園や大浦天主堂をこのコースには入れなかった。有名な観光スポット以外にも、旧居留地周辺には100年以上前にできた坂道、石畳、側溝、ネームプレート、洋館など、歴史を物語るものが多く残っているため、それを歩いて見てもらおうということにした。コース作りのために、より詳しくエリアを調べると、そこに暮らした人々の感動的なストーリーも出てきた。さるくコ

ースでは、その文化財がいかに価値があるかといったことだけではなく、ここにはこういう人が住んでいて、こんなラブロマンスがあった、こんな悲話もあった、といったことを紹介し、当時のことをイメージできるような話を盛り込んでいこうということになった。

「さるくコース」のマップは、公募で広く市民の意見も取り入れて工夫し、歴史的な事実関係を確認しながら作り上げていった。もちろん、何度も現地に足を運んだ。坂道を歩くコースは、登りがいいのか、下りがいいのか、何度も議論を繰り返した。一つのコースを策定するために、半年間ほどの議論を重ねた。行政と市民ということで、意見が分かれることもあった。例えば、商店を地図に書き入れようという市民側に対して、行政としては、民間の個々の商店の名前を公式な地図には入れにくいという抵抗があった。だが、市職員は、市民側と一緒に実際に歩いてみることで、ランドマークとして商店は必要不可欠だということが分かり、商店の名前を地図に書き入れることになった。



まちなかの「さるくコース」標識と説明版

## 地元長崎市のまちの特徴をとことん追求

もともと長崎市のまちなみは歴史性があるうえに、まちなみは地形的には坂道が多く変化に富んでおり、市職員や市民プロデューサーたちは、探せば観光ポイントとなるネタが多く出てくると考えていた。ただ、そのネタに一般の市民や観光客がアプローチしやすい方法が整備されておらず、地図や解説がなくても、わざわざ訪れようとするのは、マニアックな人だけだった。しかし、誰もが楽しく無理なく歩けるように工夫されたコースやガイドが用意されれば、地図を片手に「まち歩き」をする人が増えるようになる。そうした「まち歩き」の観光スタイルは、いろいろなネタが散在する長崎市にちょうど合っていた。分かりやすい地図をもとにまち歩きをすれば、「こんなところにそんなすごい人のお墓があったとは知らなかった」と、新たな発見ができる。また、歴史だけではなく、「この路地にこんな店があったのか」、「ここはこんなに眺めが良かったのか」といった発見もある。「ずっと住んでいる人でも知らなかった」、といった発見が飛び出すようなコースづくりを市民プロデューサーたちは目指した。

## 新たな体験機会を生み出すコースづくり ～「長崎学さるく」の例から～

「長崎学さるく」の中では、芸子さん呼んで料亭でご馳走をいただくというコースを作った。料金は2万円で、様々なコースの中ではダントツに高額だった。最初、料亭に話を持っていくと、「お客さんが集まるはずがない」と断られた。仕方なく市民プロデューサーの個人的な関係から協力してもらえる料亭をなんとか見つけて、ようやく試しにやってみることになった。ところがコースの募集をすると、あっという間に30名の予約が埋まった。申込みが多かったのは、50～60歳代の女性だった。話を聞いてみると、主婦は男性と違って、料亭で接待という機会はあまりなく、芸子さんの踊りを直接見たこともほとんどない。美味しいものを食べて、踊りを見ることもできて2万円、という価格は通常価格より割安だったため、女性の申込みが殺到した。当日は、参加者の女性たちも着飾って、非常に華やかな会になった。

### 3. ひと活かして発展した「さるく博」

#### 独自の案内スタイルを確立した「さるくガイド」～伝える相手は好きな人～

さるく博で最も重要な役割を果たすのが「さるくガイド」のガイド役だが、長崎市にはガイドを養成しやすい素地がもともとあった。昔から組織立って活動する「ボランティアガイド」が多くいたため、ボランティアを全くゼロから養成するという必要がなかった。「さるくガイド」は、これまでの長崎市を含めて全国各地にいるボランティアガイドとは異なるガイドを行う。市事務局と市民プロデューサーは、あえてこれまでにないガイドの仕方を求めたため、ガイドの人たちに納得してもらうまでは大変であった。

市の職員はガイド役たちに、「さるくガイド」に大切なこととして「恋人や家族、自分が好きな人に伝えるのと同じように話してください」と説明してきた。ガイドとして観光客に、長崎の歴史・文化は伝えて欲しいが、まず何よりも、気持ちを込めてハートを大事にして欲しいということを訴えてきた。

ボランティアガイドと言えば、一般に郷土の歴史を中心とした案内のイメージが強いが、観光客には歴史の好きな人も、そうでない人もいる。市民プロデューサーは、ガイドには、相手をよく見て、歴史以外の案内も工夫して取り入れてもらうようにした。例えば、「ちゃんぽん屋の前を通ったら、『ここのお店は具が多くっておいしいんですよ』と紹介してみたり、『このマンホールは、なぜこんな模様が入っているのか分かりませんが、昔から外すと祟りがあるといった話もあって外さないんですよ』、と地元だから知っているという話も盛り込んでください」、といったように。市民プロデューサーが、そういう話を意識的に取り込んでいくようにガイドに促すと、ガイドたちは最初、「そんな話、本当にウケるんですか?」、と納得しない様子だったが、実際にそうした歴史以外の話をしてみると、それまで知らん顔していた若い観光客からも反応が返ってくるようになった。ガイドたちは、「ああ、

こんなガイドの仕方もあるのか」と手応えを感じ、次第に「さるくガイド」という独自の案内スタイルが出来上がっていった。

これまで、どんな観光客が来てもガイドの説明スタイルは一方通行であることが多かったが、地元長崎の食べ物の話を挟み込む人、子供の頃に遊びまわった思い出を語る人、ガイドそれぞれに持ちネタができ、回を重ねるごとに変化していった。

## 独自の養成方法で裾野が広がる「さるくガイド」

さるく博の開催に向けて、基本理念の一つである「ひと活かし」を具現化するには、「さるくガイド」が不可欠であり、予想する客数をもてなすにはかなり多くの数のガイドが必要とされたため、ガイド養成にも独自の工夫をしていった。研修は、従来のボランティアガイドであれば、平日に研修をするが、会社等に勤めている人も受講しやすいように、土日を中心に研修をした。また、ガイドの養成では、長崎の歴史・文化や「長崎さるく」についての講座を1日だけ聞いてもらい、あとはコースごとの研修にした。地元住民なら、長崎市のことは大体は分かっているため、全体的なことは必要最小限にした。長崎市全体のことを何でも話すガイドではなく、エリアごとに研修を行い、当該エリアのプロになってもらうようにした。受講者は、希望するコースのみ研修を受ければよく、コースでの研修は、1回目は講師が実際に歩いて教え、2回目は2週間後くらいに受講者が実際に自分でガイドをする。これで、そのコースの「さるくガイド」として資格が認められる。この養成方法で、「さるくガイド」の裾野が広がっていった。



ガイド研修の様子

一度いずれかのコースの「さるくガイド」になると、他のガイドの人が行うツアーに研修として参加できる。コースを歩く時は、案内をするガイドと、一番後ろについて車の安全確認などをするサポーターとの2人でワンセットとなっているため、研修中は、サポーターとしてツアーに入る。研修中のガイドは、先輩ガイドの説明を聞いて、コツを掴んで上達する。そして、自分なりに手作りの差し棒を使用したり、写真や図を駆使した説明版（ファイル）を作ったりと、それぞれに様々な工夫をし、ガイド全体のレベルが上がっていった。

ガイドをこなしていくうちに、ますます向上心に火がつくようで、新しいコースができると自主研修をするようになった。ガイドたちは、新しいコースを自主的に



「さるくガイド」が案内する様子とユニホーム

訪ねて歩き、地元の関係者にいろいろな質問をして情報を集めて歩く。地元からは、「ガイドさんが（自主研修で）熱心なのはいいが、バラバラで来ずにまとめて来て欲しい」と、事務局に連絡が入るほどだという。

## **少しずつ試行的に導入することで市民の認知を得て、協力の輪を広げた**

計画が公表された頃は市民の関心が今一つだったさるく博だが、2006年の本イベントの前に、2004年には1か月間、2005年には3か月間、と試行的にプレイベントを重ねていった。それにより、次第にこれまでとは違う博覧会の様子が、市民の耳目に触れることになった。

当初は無反応だった市民も、試行的に行われたさるく博プレイベントを見聞きすることで、「何かやりよるね」と関心を持ち始め、実際に参加してみて、「やってみたらわりとおもしろかね」といったように変化していった。2年間のプレイベント期間を経ることで、関わる市民が徐々に増えて、当初はどこか懐疑的だった市民全体の論調が好意的なものに変わっていった。

「協力したいけど、どうすればいいか」、「自分はこんな特技をもっているけど役に立つかな」といったような市民からの問い合わせが、市事務局や市民プロデューサーに次々と寄せられるようになり、市全体で取組協力体制ができあがった。

## **地元事業者と観光客のコミュニケーションを生み出す ～市場コースの例から～**

さるく博には、長崎市民が日頃買い物に出かける“市場”を歩くコースがある。市場の魚屋は、普段は自分から観光客に声をかけるということはしないが、ガイドが間にいるため、「あら、東京から来なさったとね、じゃあ、これ食べてみんね、おいしかよ〜」、と観光客に声をかけるようになり、ガイドを通じて、魚屋と観光客の間にコミュニケーションが生まれている。観光客が増加することで土産品の売上もあがるため、商店側はさるく博を歓迎するし、観光客も商店の人との会話を楽しんでおり、まちの中に新しい好循環が生まれつつある。

### **「さるく博」のフィナーレ**

当初、そのおもしろさが伝わりにくかった「まち歩き」だったが、案内する人、案内される人、協力する人など参加者が徐々に増え、まちの中に新しい“循環”の輪が目に見えるようになってくると、逆風が大きな順風が変わっていった。「もし『さるく博』が1年だけのイベントだったら、『まち歩き』は市民に浸透する前に終わっていたかもしれなかった」と、ある市民プロデューサーは話す。

さるく博が終盤を迎える頃、ある市民プロデューサーは、まちでいきなり「さるくガイ

ド」の人から呼び止められて腕をつかまれた。『さるく博』が終わったら、このままやめるつもりね?」、と訊ねられた。「そうですね、11月で終わりですね」と答えると、「つまらん!」、とその「さるくガイド」は怒り出した。「やめたら困る!私はこれが生きがいのごとなつとるけん、続けてくれんね」。ガイド以外のいろいろな人からも、さるく博がなくなってしまうことを惜しむ声が強くなっていた。

さるく博が終わる時に、「さるくガイド」たちは、自分のコースにある協力店舗に行って、自らその店舗の饅頭やお寿司を買って、「これまでありがとうございました。11月で終わるんですよ」、と挨拶をして回っていた。もちろん、お礼の挨拶をして欲しいと事務局からガイドに連絡があった訳ではなく、「さるくガイド」たちは、自主的に挨拶回りをしていた。市民プロデューサーがお世話になった店舗に挨拶に行くと、「あんたのごと(様に)ね、いっぱいガイドさんがお礼に来てくれるとよ」と言われた。その時、市民プロデューサーは、市内に人の輪とお金の輪が広がっているということを実感した。いつの間にか、「市民が主役」の博覧会が、市民プロデューサーや市事務局が想像しなかったところにまで根付いていた。

#### 4. 発展する「長崎さるく」とその将来展望

##### **博覧会後に、ますます発展する「長崎さるく」**

さるく博の終了後も、“まち歩き”は「長崎さるく」として市民や観光客に定着してきている。「長崎さるく」は、年末年始を除き、年間ずっと毎日、どこかのコースで行われている。毎年、秋には1か月間のイベントも行われる。また、「さるくコース」が新たに開発されている。2009年、安政の開港150周年にあたり、2010年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」が放映されることもあって、2009年4月から「長崎さるく幕末編」のイベントが行われる。

最近では、コースを歩くだけでは物足りない、という人も出てきたため、市の「ながさきの食推進室」では、3つの「さるくコース」を麺類ばかりを求めて食べ歩くという企画を行い、30名ほどが参加した。「長崎さるく」の市の担当部署は「さるく観光課」だが、市民への定着、裾野の広がりとともに、他の部署でも「長崎さるく」を取り入れた施策を「さるく観光課」と連携しながら進めるようになってきている。例えば、小学生がデザインしたまちの花壇を「さるくコース」で紹介したり、「さるくコース」作りで発掘された良好なビューポイントが景観行政に生かされるなどしている。教育の現場では、子どもたちが「総合的な学習の時間」に、「さるくコース」を先生と一緒に歩いて学習を行っている例もある。



「長崎さるく」の参加者の様子と参加証

また、国民健康保険課では、長崎さるくのマスコットキャラクターである「さるくちゃん」を利用し、太ってしまったさるくちゃんが「さるいとけばよかった・・・」とメタボリックシンドロームの予防を呼びかけPRしている。

## **将来の展望は、まるごと市民が運営する「長崎さるく」**

将来への展望について、ある市民プロデューサーは、「最終的には市民で、事務局も含めて全部を運営できるようになればいいなと思うんですよ。今はまだ、長崎市が事務局を運営してお金も出しているが、長崎市は後方支援をするような形になれば理想的」、「長崎市では、市民と行政がようやく肩を並べたところだが、今後は、市民がより一層主体性を持って動くようになれば」、と語る。

実際に、市民側からそうした方向を模索する取組も生まれつつある。その一つが、NPO法人（特定非営利活動法人）の立ち上げである。さるく博の市民プロデューサーには95名がいたが、初期の頃から関わった人など11名が、「NPO法人長崎コンプラドール」を設立した。コンプラドールとは、“仲買人”を意味するポルトガル語で、長崎奉行に出島への出入りを許された日本人貿易商を意味する。「長崎コンプラドール」は、市内はもとより、市外や県外でのまち歩き観光を、市民の立場から支援する。さるく博の際にも、市街地の外のエリアにまで「さるくコース」を広げて欲しいという市民からの要望が一部にあったが、実現することはできなかった。そうした多様な要望に応えるには、行政では限界がある。そこで、NPOとして、市民のコースづくりなどを手伝うことができればと考えた。さらに、市外からも「さるく」をやってみたいという要望が寄せられ、一緒にまち歩きをしてアドバイスし、地図づくりを支援し始めている。NPOの「長崎コンプラドール」は、“コンプラドール（仲買人）”として、「さるく」を通じて長崎市とその内外をつなぐ役割も果たし始めている。

■「長崎遊さるく」のコース一覧（45コース）

ゾーン名	コース名	番号
居留地界限	長崎は今日も異国だった ～南山手洋館、港がみえる坂～	1
	ハイカラさんが往来しよらす ～東山手洋館群とオランダ坂～	2
	憧れの居留地海岸通り ～明治の洋館と事始めの地を訪ねて～	3
新地・唐人屋敷界限	媽祖様と唐りゃんせ ～唐人屋敷の歴史～	4
	チャイナタウン長崎 ～新地中華街界限をぶらり散策～	5
丸山界限	文人墨客も思案した？ ～丸山巡遊～	6
	高島秋帆旧宅跡から大徳寺へ ～江戸、明治の風情が残る奥丸山～	7
中島川・寺町～風頭界限	懐かしの街並み ～中通り界限～	8
	怖かばってん、重文楽しか界限 ～光源寺から興福寺へ～	9
	重文縁起よか界限 ～延命寺から崇福寺へ～	10
	真ん中歩いても橋さるく？ ～中島川石橋めぐり～	11
	龍馬が見上げた長崎の空 ～風頭から亀山社中跡、そして寺町へ～	12
鳴滝～新大工界限	元祖長崎 ～桜馬場・夫婦川から新大工～	13
	超VIP出島蘭館医「施福多」の奇跡 ～シーボルトへの道～	14
西坂～諏訪の森界限	長崎はローマだった ～西坂の丘から愛と祈りの小径へ～	15
	松森神社から諏訪神社へ ～緑に包まれた聖地・天満宮とお諏訪さん～	16
	長崎奉行所を訪ねて ～時代を超えた長崎の中心地～	17
浦上界限	アンゼラスの鐘の丘を訪ねて ～原爆落下中心地・平和公園から浦上天主堂～	18
	被爆校舎で耳をすませば ～原爆落下中心地から城山小学校へ～	19
	世界で2番目の一瞬に思いをよせて～旧長崎医科大学、山王神社から坂本国際墓地へ～	20
淵・稲佐界限	国際都市・稲佐の華やかな交流史 ～淵神社から稲佐悟真寺国際墓地～	21
	絶景！パノラマ360° ～稲佐山～	22
元船・出島みなと界限	長崎港水辺散策 ～出島ワープ・長崎水辺の森公園～	23
浜町界限	浜ぶらコース ～アーケードと路地裏ギザギザ歩き～	24
茂木界限	茂木みなと散歩 ～漆喰塀の旧家を眺めつつ～	25
古賀・矢上・日見界限	長崎街道矢上宿歴史探訪 ～江戸と長崎を結ぶ道～	26
	日本一！長崎ペンギン水族館ツアー ～山・川・海の自然体験さるく～	27
	四百年の歴史を誇る植木技術と庭園 ～古賀・植木の里散策～	28
深堀界限	深堀城下町探訪 ～語り継がれる深堀義士伝の町～	29
外海界限	夕陽が美しいキリシタンの里 ～遠藤周作が魅せられた町～	30
	日本一の清流と伝統的な街並み・神浦 ～のんびり・ゆったり・そぞろ歩き～	31
香焼界限	今も弘法さんの伝説が残る街 ～海と緑と太陽と造船の香焼～	32
伊王島界限	体感！ココロとカラダが元気になる伊王島 ～やすらぎのリゾートアイランド～	33
高島界限	コソレトブルーの海の楽園・高島～周囲6.4km、島の魅力がギョッ！と詰まった町～	34
野母崎界限	平安時代に開かれた長崎の要所 ～点在する寺社巡りで野母崎再発見～	35
三和界限	知らされる遺跡が残る三和探訪 ～川原大池におち姫伝説あり～	36
琴海エリア	美しい海に囲まれた緑ゆたかなまち ～琴の海の歴史と自然、新鮮な食材を訪ねて～	37
フリーゾーン	長崎港クルージング ～潮風に吹かれて海さるく～	38
	長崎ライトアップめぐり ～美しき光の彩りを求めて～	39
	1000万ドル夜景ツアー ～日本三大夜景・稲佐山ほか～	40
拠点施設	歴史浪漫散策 ～グラバー園～	41
	出島タイムスリップ ～扇形の宝の島～	42
	長崎原爆資料館めぐり	43
	長崎歴史文化博物館めぐり	44
	長崎県美術館めぐり	45